

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

昭和戦前期『音楽教育研究』『音楽教育』総目次

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 信時, 裕子, Nobutoki, Yuko メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1408

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



昭和戦前期『音楽教育研究』『音楽教育』総目次
信時 裕子

初出：『文献探索 2008』（金沢文圃閣刊） p.387～416
<http://id.ndl.go.jp/bib/000000103315>

変更履歴

最終ページの注 iv, v 追記 （2021年6月）

昭和戦前期『音楽教育研究』『音楽教育』総目次

信時裕子

はじめに

明治生まれ、大正～昭和期の作曲家・信時潔（のぶとき きよし）の研究のため関係資料を集めている。1939年（昭和14）創刊の『音楽教育研究』という雑誌を手にしたところ、信時潔が作曲募集の選評を書いたり、信時作曲の作品が掲載されていたり、関係する記事が比較的多いことに気づいた。さらに詳しく各号を調べてみると、信時潔の人脈が動いている、という感触があった。巻頭言を多く執筆している片山颯太郎は信時潔の門下生で、この雑誌の中心的人物であった。

新訂尋常・新訂高等小学唱歌の教材解説、芸能科音楽などをも扱った、音楽教育の現場に直結した内容を持ち、およそ三年半の間に全42冊刊行され、雑誌統廃合の折には教育部門における唯一の音楽雑誌として残されたにも関わらず、戦後の研究でこの雑誌について言及している文献はほとんど見あたらない。『日本音楽教育事典』（日本音楽教育学会編 音楽之友社 2004）でさえ、その項目もない。『音楽教育の証言者たち. 上 戦前を中心に』（木村信之編著 音楽之友社 1986）の中で、わずかに触れられているが、団体名称や人名、事実関係が混乱しているなど、正確な記録とは言いがたく、さらなる考証が必要と思われる。雑誌『音楽教育研究』『音楽教育』は音楽教育史において、その存在の形跡を抹殺されたのかと思うほどである。幸い全冊の所在が判明し、全号に目を通すことが可能とわかった。総目次作成は、ひとつには自分の研究のために、同時に今後の音楽教育史研究、日本洋楽史研究の材料としても役に立つのではないかと考え、今回の作業にとりかかった。

『音楽教育研究』『音楽教育』の概要 （*引用は各号編集後記による）

1939年（昭和14）10月創刊。編集者は音楽教育研究会（代表者 大村弘毅）。発行所は大日本図書（代表者 杉山常次郎）。「前々より音楽教育雑誌を出さないかとのお勧め」を受けていたところ「時局下の音楽教育の重要性を思ふ時、斯道のため指導精神をもてる月刊雑誌を刊行することの意義深きといふよりはより必要なるを痛感して」創刊された。2巻9号より「用紙の無駄を省くため」予約販売となる。3巻1号より発行所が日本出版（代表者杉山常次郎）となる。3巻(1941年)8月号は「諸種の都合により」休刊。9月から11月号は刊行され、ここまでの通算は25冊。3巻11号(1941年12月号)より『音楽教育』に誌名変更。雑誌統廃合により「関係当局並に日本音楽文化協会のご指導のもとに、文化翼賛の一助ともなり、決戦時下、健全なる国民音楽の育成」する雑誌として再出発することとなった。編集兼印刷人は大日本出版（代表者 河村敏雄）。発行所は大日本出版。改題の翌月1942年1月は刊行されず、2月号に「本号は1, 2月合併号とした」とある。改題後計17冊を刊行。1943年（昭和18）5月、「紙もまた兵器である事を諒といたし、過去への愛惜もすべて一蹴して」（「終刊の辞」）終刊となった。

凡例

1. 旧字は新字に置き換えた。ただし人名に限ってなるべく旧字を残した。かなづかいは、旧かなづかいを生かした。
2. 記事タイトル、著者等は、原則として掲載ページから採録し、必要に応じて [] で補記した。
3. 目次の掲載順によらず、雑誌の冒頭からページ順に配列した。逆ページの部分も、冒頭からのページ数、小～大の形で示した。ただし一連の特輯記事の間に入る囲み記事などは、特輯記事の後に配列した。
4. 目次で取り上げられていない同誌の原稿募集、及び広告などは収録しない。
5. 特輯名やコラム名は、目次にしか書かれていない場合にも、必要に応じて補った。
6. 連載の記事タイトル、著者、回次等は、なるべく統一的に表示した。「未完」「承前」等の用語で連載を示している場合や、回次が省略されている場合、[] で補った。
7. 文字の明らかな誤記・誤植等は訂正して [] で補記した。ページ数の誤植は正しいものに置き換えた。
8. ページ付けの無い【巻頭楽譜】、【口絵写真】などは、雑誌の中での配列がわかるように、冒頭から0(1), 0(2), 0(3)・・・の仮ページ番号で示した。
9. 目次に表示されて、本文中には表示されていない巻頭言、詩、童謡、随筆、座談会など記事タイトルに付記された語は、< >を付けて適宜補った。また、記事タイトルから楽譜又は歌詞であることが判断できない場合は[楽譜][歌詞]の語を補った。
10. 各記事の間や、空白箇所、多くは囲み記事として散在するいわゆる「雑報」は、目次には現れないが、■に続けて記事見出しを列記した。

『音楽教育研究』

第1巻第1号(1939年10月号)

【口絵写真】伊澤修二先生	0(1)
【口絵写真】伊澤修二先生編「小学唱歌」	0(2)
[序]	信時潔 0(3)
【巻頭楽譜】来れや来れ	外山正一作歌 伊澤修二作曲 信時潔和声 0(4)
【巻頭楽譜】花さく春	伊澤修二作歌作曲 信時潔和声 0(5)
【巻頭楽譜】かり	伊澤修二改作 伊澤修二作曲 信時潔和声 0(6)
教育音楽の動向	片山颯太郎 2～6
音楽と教育	林博太郎 7～13
伊澤修二先生と初期音楽教育—(明治音楽史稿)—	遠藤宏 14～17
伊澤修二先生略伝	[遠藤宏] 18
音楽と衛生(一)	岡田道一 19～22
親心と親馬鹿	中野義見 23～25
銃後の母<詩>	川路柳虹 26～27
歌詞に就いて	河井醉茗 28～29
祝日唱歌『明治節』の取扱ひ方	澤崎定之 30～32
祝日唱歌『明治節』のオルガンの弾き方	奥田耕天 33～34
児童のための楽譜指導に就いて	幾尾純 35～39
新訂小学唱歌『影法師』の遊戯	清水和歌 40～42
小学校時代の唱歌の思ひ出(その一)	
むかしの唱歌	堀内敬三 43～45
うたのおもひで	日夏耿之助 45～47
地下室の唱歌	平井美奈子 47～48
唱歌の思ひ出	草川信 48～49
幼年のころ	水野康孝 49～51
農村の小学生	津久井静子 51
滞欧雑観	長谷川良夫 52～56
海外楽信	56
教育思潮概観	香原一勢 57～59
音楽界彙報	60～61
第一回作曲募集	62
原稿募集・投稿規定	63

編輯後記		64
創刊を祝ひて<短歌>		64
教材研究 (輪講式)		70~122
	犬童球溪	
	歌詞楽曲 片山穎太郎	
	歌ひ方 城多又兵衛	
	伴奏法 水谷達夫	
	教授法 井上武士 山本壽	
新訂尋常小学唱歌	第一学年用 月	
	第二学年用 影法師	
	第三学年用 取入れ	
	第四学年用 八幡太郎	
	第五学年用 いてふ	
	第六学年用 秋	
新訂高等小学唱歌	第一学年男子用 満洲の野	
	第一学年女子用 子守歌	
	第二学年用 明治神宮	
	第三学年用 稲刈	

『音楽教育研究』

第1巻第2号 (1939年11月号)

【口絵写真】教室より中継の学校放送(東京高等師範学校付属小学校) スタジオよりの学校放送(埼玉県大宮尋常小学校児童)		0(1)
【口絵写真】祝祭日唱歌楽譜(明治二十六年刊行)		0(2)
【巻頭楽譜】大陸封鎖	中勘助作詞 片山穎太郎作曲	0(3)
【巻頭楽譜】地獄風呂	中勘助作詞 片山穎太郎作曲	0(4)
【巻頭楽譜】ポンポン船	中勘助作詞 片山穎太郎作曲	0(5)
ラジオと音楽教育	小尾範治	2~7
祝日大祭日唱歌制定史—(明治音楽史稿)—	遠藤宏	8~15
<『音の世界』第一回> 第一講 音とは何か	サー・ウィリアム・ブラッグ原著 栗原嘉名芽訳	16~21
大槻如電翁作の「軍艦唱歌」		21
唱歌教育の方法に就いて	山本壽	22~23
青年希望の歌<詩>	野口雨情	24~25
少年「陸奥の吹雪」 大和田建樹先生を追慕して	濱田廣介	26~28
軍歌に殉じた大和田建樹	小林愛雄	28~29
放送と唱歌	沖不可止	30~37
リズム練習について	弘田龍太郎	38~42
唱歌遊戯 菊 (庭の千草)	戸倉ハル	43~47
オルガンの弾き方に就いて	奥田耕天	48~49
大人と子供	松原至大	50~51
教育思潮概観	工藤亨	52~54
海外楽信		55
音楽界彙報		56~59
官報音楽関係事項抄録		60~61
第二回作曲募集		62
原稿募集・投稿規定		63
協和音		64~65
編輯後記		66
教材研究 (輪講式)	歌詞楽曲 片山穎太郎 歌ひ方 澤崎定之 伴奏法 水谷達夫 教授法 越尾隆 佐藤益喜	70~124
新訂尋常小学唱歌	第一学年用 つみ木	
	第二学年用 時計の歌	
	第三学年用 日本の国	
	第四学年用 霜	
	第五学年用 入営を送る	
	第六学年用 出征兵士	
新訂高等小学唱歌	第一学年用 御代の栄	

第二学年用 菊の香
第三学年用 山茶花三題

『音楽教育研究』

第1巻第3号(1939年12月号)

【口絵写真】市民音楽院の斉唱と講習実況	0(1)
【口絵写真】第三回文部省美術展覧会出品画より	0(2)
【巻頭楽譜】冬の歌(新古今和歌集より)	0(3)
音楽と国民性	長谷川如是閑 2~6
芸術音楽と教育音楽	山根銀二 7~12
〈『音の世界』第二回〉 第一講 音とは何か	サー・ウィリアム・ブラッグ原著 栗原嘉名芽訳 13~21
お猿さんのお家(動物園にて)〈童謡〉	葛原しげる 22~23
音楽と衛生(二)	岡田道一 24~27
官幣大社 近江神宮奉讃歌[楽譜]	近江神宮奉賛会撰歌 東京音楽学校作曲 27
周囲を顧みて	水野康孝 28~31
朝鮮に於ける音楽教育	吉澤實 32~35
市民音楽院を語る	奥田良三 36~38
吹奏楽講話(一)	春日嘉藤治 39~46
唱歌リレー放送批評(昭和十四年十一月二十日 小学生の時間)批評	澤崎定之 47~51
「いてふ」(文部省唱歌 尋五・一九)を聞いて	
小学校時代の唱歌の思ひ出(その二)	
伊澤先生のヴァイオリン	長谷川良夫 52~53
昔の唱歌の思ひ出	大和田愛羅 53~54
唱歌のおもひで	森本覚丹 54~56
子供の頃の唱歌	中野義見 56~57
思ひ出の「雪の曙」	濱田廣介 57~59
大阪に於ける昭和十四年の音楽界の回顧	林雄一郎 60~63
原稿募集・投稿規定	63
音楽界彙報	64~65
第三回作曲募集	66
協和音	67
編輯後記	68
教材研究(輪講式)	歌詞楽曲 片山穎太郎 73~128
	歌ひ方 矢田部頸吉
	伴奏法 黒澤愛子 水谷達夫
	教授法 岩上行忍 山田辰雄
新訂尋常小学唱歌 第一学年用 兎	
第二学年用 うちの子ねこ	
第三学年用 飛行機	
第四学年用 餅つき	
第五学年用 水師宮の会見	
第六学年用 鎌倉	
新訂高等小学唱歌 第一学年用 冬来る	
第二学年男子用 校庭にて	
第二学年女子用 渡り鳥	
第三学年用 煤掃	

『音楽教育研究』

第2巻第1号(1940年1月号)

【口絵写真】紀元二千六百年奉祝国民歌発表演奏会	0(1)
【口絵写真】マクス・レーガー	0(2)
【巻頭楽譜】雪ですぬ	葛原しげる作詞 佐々木すぐる作曲 0(3)
【巻頭楽譜】銃後の母(第一回入選曲)	川路柳虹作詞 石川強作曲 0(4)
紀元二千六百年と日本の音楽	片山穎太郎 2~5
紀元二千六百年頌歌の歌ひ方	澤崎定之 6~10
母の背は(紀元二六〇〇年記念 国民歌謡)[歌詞]	10

マクス・レーガーの生涯	エルンスト・ブツェル 伊東	11～15
『音の世界』第三回 第二講 音楽に於ける音	勉訳	
椿<詩>	サー・ウィリアム・ブラッグ原	16～23
音を主とした江戸時代のお正月気分	著 栗原嘉名芽訳	
音から考察した江戸時代大阪の正月行事	茅野雅子	24～25
正月に縁由ある南蛮楽器チャルメラ考	町田嘉章	26～29
若き妻(紀元二六〇〇年記念 国民歌謡)[歌詞]	南木芳太郎	30～32
吹奏楽講話(二)	遠藤宏	33～36
盲学校に於ける音楽教育		36
音楽と現代の日本と	春日嘉藤治	37～41
思ひ出づる俣に	橋本清司	42～45
教育思潮概観	小寺融吉	46～47
教育音楽研究大会の記	平原壽恵子	48～50
第一回作曲入選発表	林友春	51～53
選者の言葉	岡村勝	54～57
音楽界彙報		58
海外楽信	信時潔	58～60
官報音楽関係事項抄録		61～62
第一回論文募集		63
第四回作曲募集		64～65
応問		66
協和音		67
編輯後記		68
教材研究 (輪講式)	歌詞楽曲 片山穎太郎	78～128
	歌ひ方 澤崎定之	
	伴奏法 黒澤愛子 水谷達夫	
	教授法 松本寛郎 小島喜久壽	
新訂尋常小学唱歌 第一学年用 紙鳶の歌		
第二学年用 雪		
第三学年用 冬の夜		
第四学年用 雪合戦		
第五学年用 兒島高德		
第六学年用 スキーの歌		
新訂高等小学唱歌 第一学年用 御裳濯川		
第二学年用 少女のまとも		
第三学年用 日の御旗		

『音楽教育研究』

第2巻第2号(1940年2月号)

【巻頭楽譜】春の散歩

【巻頭楽譜】青年希望の歌(第二回入選曲)

子供の生活に音楽を感じて

総べての児童に才能あり—指導法についての私見—

子供たちは歌ひたがってゐる!

『音の世界』第四回 第二講 音楽に於ける音

小鳥の影<詩>

歌曲の指導

灯心草

吹奏楽講話(三)

梅の節供 建国祭の歌[楽譜]

網代の冬

海外楽信

女子教育の動向—教育思潮概観—

第二回作曲入選発表

町田有史作詞 益子九郎作曲	0(1)
野口雨情作詞 小島正雄作曲	0(2)
倉橋惣三	2～4
鈴木鎮一	5～10
酒井悌	11～15
サー・ウィリアム・ブラッグ原	16～25
著 栗原嘉名芽訳	
中西梧堂	26～27
海銚義美	28～30
齋藤潔	31～33
春日嘉藤治	34～43
佐々木英作曲	44
武内俊子	45～47
	47
奥田美穂	48～50
	51

第二回募集作曲について	片山颯太郎	51～53
音楽界彙報		54～55
官報音楽関係事項抄録		56～57
批評と紹介		58～59
第五回作曲募集		60
第一回論文募集		61
応問		62
協和音		63
編輯後記		
教材研究 (輪講式)	歌詞楽曲 片山颯太郎	78～128
	歌ひ方 澤崎定之	
	伴奏法 黒澤愛子 水谷達夫	
	教授法 田村範一 河野信一	
新訂尋常小学唱歌 第一学年用 僕の弟		
第二学年用 梅に鶯		
第三学年用 私のうち		
第四学年用 近江八景		
第五学年用 雛祭		
第六学年用 雪		
新訂高等小学唱歌 第一学年用 (男) 雪の行軍		
第一学年用 (女) 雛祭の宵		
第二学年用 霞三題		
第三学年用 冬の興		

『音楽教育研究』

第2巻第3号 (1940年3月号)

【口絵写真】フランツ・エッケルト		0(1)
【口絵写真】エッケルト筆「岸の桜」楽譜		0(2)
【巻頭楽譜】世界地図	土岐善麿作詞 長谷川良夫作曲	0(3)
【巻頭楽譜】お猿さんのお家(第三回入選曲)	葛原しげる作詞 猪股徳一作曲	0(4)
教育に於ける音楽	入澤宗壽	2～7
エッケルトと教育音楽—(明治音楽史稿)—	遠藤宏	8～11
紀元二千六百年	有馬大五郎	12～13
南の海にて<詩>	武内俊子	14～15
<『音の世界』第五回> 第三講 街の音	サー・ウィリアム・ブラッグ原著	16～24
台湾に於ける音楽教育	栗原嘉名芽訳 筑摩三朗	25～28
吹奏楽講話(四)	春日嘉藤治	29～31
進軍間奏譜	石塚響一	32～38
支那音楽ばなし	後藤和夫	39～43
唱歌リレー放送(昭和十五年二月十二日 小学生の時間)批評 「兒島高德」(文部省唱歌 尋五・二三)を聴いて	中野義見	44～47
技術教育の展望—教育思潮概観—	中村新太郎	48～50
海外楽信		50
第三回作曲入選発表		51
選者の言葉	下總皖一	51～52
音楽界彙報		53～54
官報音楽関係事項抄録		55～56
批評と紹介		57
第六回作曲募集		58
応問		59～60
協和音		61～62
編輯後記		63
教材研究 (輪講式)	歌詞楽曲 片山颯太郎	72～128
	歌ひ方 澤崎定之	
	伴奏法 黒澤愛子 水谷達夫	
	教授法 新藤武 月岡忠三	
新訂尋常小学唱歌 第一学年用 花咲翁		

	第二学年用	浦島太郎
	第三学年用	摘草
	第四学年用	何事も精神
	第五学年用	卒業生を送る歌
	第六学年用	卒業の歌
新訂高等小学唱歌	第一学年用	送別の歌
	第二学年用	告別の歌
	第三学年用	興国の民

『音楽教育研究』

第2巻第4号(1940年4月号)

【巻頭楽譜】町の小父さん

【巻頭楽譜】椿(第四回入選曲)

特輯 音楽鑑賞教育

音楽鑑賞教育の目的と範囲

音楽に於ける観照に就いて

幼児の音楽鑑賞教育

家庭に於ける音楽の鑑賞教育

私のレコードに依る音楽鑑賞指導要諦

国民学校と音楽鑑賞教育

音楽鑑賞教育とラヂオ放送

小学校に於ける音楽鑑賞教育(入選論文)

小学校に於ける音楽鑑賞教育(入選論文)

第一回歌詞募集

ドイツ人と音楽

海外楽信

〈『音の世界』第六回〉 第三講 街の音

祝日唱歌「天長節」の歌ひ方

吹奏楽講話(五)

音楽随想

第一回論文入選発表

三匹の熊公(スリー・ベアズ) <人形芝居>

社会教育の転換—教育思潮概観—

第四回作曲入選発表

選者の言葉

音楽界彙報

官報音楽関係事項抄録

応問

協和音

編輯後記

教材研究(輪講式)

武内俊子作詞 安部幸明作曲 0(1)

茅野雅子作詞 中川徹作曲 0(2)

堀内敬三 2~5

薄金兼次郎 6~10

弘田龍太郎 11~14

藤井夏人 15~18

柴田知常 19~24

近藤仙次郎 25~27

沖不可止 28~32

庄山茂吉 33~37

井坂教 38~43

32

宮内鎮代子 44~46

46

サー・ウィリアム・ブラッグ原著 47~53

栗原嘉名芽訳註

澤崎定之 54~55

春日嘉藤治 56~60

瀬戸口藤吉 61~63

63

南江治郎 64~69

平湯一仁 70~72

73

信時潔 73

74

75~76

77

78

79

歌詞楽曲 片山穎太郎 87~128

歌ひ方 澤崎定之

伴奏法 黒澤愛子 水谷達夫

教授法 今吉惺 鈴木富三

新訂尋常小学唱歌 第一学年用 日の丸の旗

第二学年用 桜

第三学年用 春が来た

第四学年用 かげらふ

第五学年用 金剛石・水は器

第六学年用 遠足

新訂高等小学唱歌 第一学年用 春の曲

第二学年用 千里の春

第三学年用 花見

『音楽教育研究』

第2巻第5号(1940年5月号)

【巻頭楽譜】心の影

【巻頭楽譜】小鳥の影(第五回入選曲)

福田滋子作詞 片山穎太郎作 0(1)

曲 中西悟堂作詞 林つや子作曲 0(2)

特輯

国民学校芸能科音楽私讃	片山頴太郎	2~5
国民学校案の芸能科音楽に対する希望	堀内敬三	6~11
国民学校に於ける芸能科音楽に対する二つの期待	中野義見	12~17
思ひつゝたまゝに	酒井悌	18~23
ナチス・ドイツの音楽教育	エルンスト・プツェル 伊東勉	24~27
伯林日本人学校の一年間	平原壽恵子	28~35
〈『音の世界』第七回〉 第四講 田舎の音	サー・ウィリアム・ブラッグ原著 栗原嘉名芽訳註	36~39
音楽のある生活	柏熊君子	40~43
歌詞募集		43
吹奏楽講話(六)	春日嘉藤治	44~49
唱歌教育の体験を語る—私の歩んできた道—	熊倉はるみ	50~53
海外楽信		53
教育思潮概観 小学校教育俸給道府懸賞支弁を繞つて	香原一勢	54~56
第五回作曲入選発表		57
選者の言葉	片山頴太郎	57
音楽界彙報		58
国民学校教則案(抄録)		58
官報音楽関係事項抄録		59~60
応問		61
協和音		62
編輯後記		63
教材研究 (輪講式)	歌詞楽曲 片山頴太郎	75~128
	歌ひ方 澤崎定之	
	伴奏法 黒澤愛子 水谷達夫	
	教授法 坂口五郎 池田浩	

新訂尋常小学唱歌	第一学年用 鳩 兵隊さん
	第二学年用 二宮金次郎 雲雀
	第三学年用 木の芽
	第四学年用 蚕
	第五学年用 舞へや舞へや
	第六学年用 瀬戸内海
新訂高等小学唱歌	第一学年用 鯉幟
	第二学年用 羽衣

『音楽教育研究』

第2巻第6号(1940年6月号)

【巻頭楽譜】野うばら	町田有史作詞 益子九郎作曲	0(1)
【巻頭楽譜】南の海(第六回入選曲)	武内俊子作詞 志賀静男作曲	0(2)
芸能科の教育	入澤宗壽	2~6
教育音楽の発達	ハンス・ヨアヒム・モーゼル 牧 定忠訳	7~15
海外楽信		15
音楽教師論	田口鷲雄	16~19
学校放送聴取とその取扱方	平塚新次郎	20~24
〈『音の世界』第八回〉 第四講 田舎の音	サー・ウィリアム・ブラッグ原著 栗原嘉名芽訳註	25~29
興亜建設の歌<詩>	南江治郎	30~31
「抒情詩曲」の一年	水野忠恂	32~37
吹奏楽講話(七)	春日嘉藤治	38~43
鼓笛隊とは	鈴木正三	44~50
韻律の日本的伝統	田宮虎彦	51~54
作家の日記から— 一九二八年 —	フランツ・モルナール 松室重 行訳	55~58
教育音楽漫筆—若き楽友へ贈る—	石塚響一	59~64
教育思潮概観 筆記試験に対する批難	香原一勢	65~67
文検音楽科予備試験問題(昭和十五年四月)		68
第六回作曲入選発表		69

選者の言葉	69～70
音楽界彙報	70
官報音楽関係事項抄録	71～72
第七回作曲募集	73
応問	74
協和音	75
編輯後記	76
教材研究（輪講式）	85～128

歌詞楽曲 片山頴太郎	85～128
歌ひ方 澤崎定之	
伴奏法 黒澤愛子 水谷達夫	
教授法 荒木得三 岡村勝	

新訂尋常小学唱歌	第一学年用 電車ごっこ 砂あそび
	第二学年用 折紙 竹の子
	第三学年用 青葉
	第四学年用 藤の花
	第五学年用 朝日は昇りぬ
	第六学年用 我れは海の子
新訂高等小学唱歌	第一学年用 太平洋
	第二学年用 蓑虫

『音楽教育研究』

第2巻第7号（1940年7月号）

【巻頭楽譜】見渡せば（古今和歌集より）	素性法師[作歌] 片山頴太郎 0(1)
【巻頭楽譜】やどりして（古今和歌集より）	作曲 紀貫之[作歌] 片山頴太郎作 0(2)
【巻頭楽譜】わが宿の（古今和歌集より）	曲 よみ人しらず 片山頴太郎作 0(3)
【巻頭楽譜】秋来ぬと（古今和歌集より）	曲 藤原敏行[作歌] 片山頴太郎 0(4)
【巻頭楽譜】白雲に（古今和歌集より）	作曲 よみ人しらず 片山頴太郎作 0(5)
鑑賞法には純粹音楽を用ひよ	湯浅永年 2～8
合唱に就いて [(一)]	酒井悌 9～14
ファシスト伊太利の音楽教育	柏熊君子 15～18
作曲学講座「フーゲ」[(一)]	ステファン・クレール著 片山頴太郎訳 19～25
はたおり虫く詩	武内俊子 26～27
〈『音の世界』第九回〉 第四講 田舎の音	サー・ウィリアム・ブラッグ原著 栗原嘉名芽訳註 28～34
教育放送に於ける音楽の形式	片桐顯智 35～38
北支の音楽風景	松本四郎 39～42
第五十四回全国訓導（音楽）協議会の記	岡村勝 43～48
教育思潮概観—現代政治教育の動向—	周郷博 49～51
文部省検定（音楽）受験記	川澄健一 52～53
応問 国民学校の器楽	54～55
音楽界彙報	56
官報音楽関係事項抄録	57～58
第八回作曲募集	59
協和音	60
編輯後記	61
教材研究（輪講式）	68～120

歌詞楽曲 片山頴太郎	68～120
歌ひ方 澤崎定之	
伴奏法 黒澤愛子 水谷達夫	
教授法 阿保寛 佐藤禎治	

新訂尋常小学唱歌	第一学年用 かたつむり 牛若丸
	第二学年用 金魚 こだま
	第三学年用 蛍
	第四学年用 夏の月
	第五学年用 風鈴
	第六学年用 森の歌
新訂高等小学唱歌	第一学年用 登山
	第二学年用 月見草

『音楽教育研究』

第2巻第8号(1940年8月号)

【巻頭楽譜】線香花火

国民学校芸能科総説

絶対音感教育に関する疑義

合唱に就いて [(二)]

レコード利用の危険性

作曲学講座「フーゲ」[(二)]

望郷の花<詩>

音楽の修行と年齢

<『音の世界』第十回> 第五講 海の音

海外楽信

映画に於ける音楽の教化性

舞踊解放

音と生活

[]

趣味に惹かれて

はまなす(入選歌詞)

教育思潮概観 東亜教育大会を通して見たる

音楽界彙報

官報音楽関係事項抄録

文部省推薦レコード

第九回作曲募集

応問

協和音

編輯後記

教材研究(輪講式)

新訂尋常小学唱歌 第一学年用 朝顔 夕立

第二学年用 小馬 蟬

第三学年用 波

第四学年用 夢

第五学年用 海

第六学年用 瀧

新訂高等小学唱歌 第一学年用 秋近し

第二学年用 夕立そそぐ

齋藤潔作詞 柏木俊夫作曲 0(1)

音楽教育研究会 2~11

津川主一 12~15

酒井悌 16~21

有坂愛彦 22~25

ステファン・クレール著 片山頴

太郎訳 26~29

勝承夫 30~31

岡田次郎 32~34

サー・ウィリアム・ブラッグ原著

栗原嘉名芽訳註 35~40

40

薄金兼次郎 41~44

澁井二夫 45~47

沖不可止 48~51

寺島 51

森本治吉 52~55

喜多章 56

香原一勢 57~58

59

60~61

60~61

62

63~64

65

66

歌詞楽曲 片山頴太郎 71~116

歌ひ方 澤崎定之

伴奏法 黒澤愛子 水谷達夫

教授法 山田邦彦 久木原定

助

『音楽教育研究』

第2巻第9号(1940年9月号)

【巻頭楽譜】はまなす(入選歌詞)

【巻頭楽譜】興亜建設の歌(第七回入選曲)

国民学校音楽科の基礎訓練の問題

音楽教育を廻る最近の論議について

絶対音感教育の難点

<新刊紹介>バッハの生涯 シュヴァイツァ著 津川主一訳

音名・階名の問題について

ヨーデの歌謡集「ムジカント」について(一)

古靴ホテル<詩>

音楽教育雑感

<『音の世界』第十一回> 第五講 海の音

撥音「ン」の考察

海外楽信

師範学校に於ける器楽教授の実際(一)

海風記

喜多章作詞 長谷川良夫作曲 0(1)

南江治郎作詞 松岡敏雄作曲 0(2)

片山頴太郎 2~5

高野瀏 6~13

青柳善吾 14~24

24

橋本清司 25~34

福井直弘 35~41

水谷まさる 42~43

近森一重 44~48

サー・ウィリアム・ブラッグ原著

栗原嘉名芽訳註 49~57

峯村三郎 58~62

62

63~71

乙寺與志夫 72~75

第七回作曲入選発表		76
選者の言葉	信時潔	76
官報音楽関係事項抄録		77～78
第十回作曲募集		79
協和音		80
編輯後記		81
教材研究（輪講式）	歌詞楽曲 片山頴太郎	85～130

歌ひ方 澤崎定之
 伴奏法 黒澤愛子 水谷達夫
 教授法 田中義人 村田榮吉

新訂尋常小学唱歌	第一学年用	ひよこ 一番ぼし見つけた
	第二学年用	ポプラ 富士山
	第三学年用	噴水
	第四学年用	牧場の朝
	第五学年用	山に登りて
	第六学年用	鳴門
新訂高等小学唱歌	第一学年用	昭憲皇太后御歌
	第二学年用	野分

『音楽教育研究』

第2巻第10号（1940年10月号）

【巻頭楽譜】お留守部隊	島田芳文作詞 野村茂作曲	0(1)
【巻頭楽譜】はたおり虫〔第八回入選曲〕	武内俊子作詞 村瀬謙作曲	0(2)
絶対音感教育の是非	田村虎藏	2～5
音楽の国家統制を	門馬直衛	6～14
音楽教育新体制の第一歩	原田彦四郎	15～17
ヨーデの歌謡集「ムジカント」に就いて(二)	福井直弘	18～29
草のわが家<詩>	喜志邦三	30～31
農村の娯楽問題—特に農村劇について—	園池公功	32～36
教育の新体制—外国語軽視の傾向に就いて—	吹田順助	37～42
音楽界彙報		42
日本文学の特質	久松潜一	43～47
批評と紹介		48～50
<『音の世界』第十二回> 第六講 戦時の音	サー・ウィリアム・ブラッグ原著 栗原嘉名芽訳註	51～57
国民音楽教育試案	平井保喜	58～59
ピアノの弾き方指導(第一講)	黒澤愛子	60～69
師範学校に於ける器楽教授の実際(二)		70～81
愛の人 ベートーヴェン [批評と紹介]		81
佐貫行<随筆>	武内俊子	82～83
モザーのふるさとの一と日<随筆>	下二三十	84
橋田文相と文政の根本方策—殊に教学と科学との一致について—	香原一勢	85～88
第八回作曲入選発表		89
選者の言葉	片山頴太郎	89
はたおり虫[楽譜]	[武内俊子作詞] 前田蘆舟作曲	90
はたおり虫[楽譜]	[武内俊子作詞] 林つや子作曲	91
第十一回作曲募集		92
応問		93
編輯後記		94
教材研究（輪講式）	歌詞楽曲 片山頴太郎	100～144
	歌ひ方 澤崎定之	
	伴奏法 黒澤愛子 水谷達夫	
	教授法 太田司郎 林喬木	
新訂尋常小学唱歌	第一学年用	池の鯉 菊の花
	第二学年用	かけっこ 案山子
	第三学年用	赤とんぼ
	第四学年用	靖国神社
	第五学年用	秋の山

第六学年用 故郷
 新訂高等小学唱歌 第一学年用 高嶺の月
 第二学年用 秋草

『音楽教育研究』

第2巻第11号(1940年11月号)

【巻頭楽譜】父を迎へる歌

新時代の音楽
 国民教育としての音楽教育
 海外楽信
 音楽的断想
 音楽界彙報
 音楽理論教育の内容と構成
 大和乙女<詩>
 ヨーデの歌謡集「ムジカント」について(三)
 <『音の世界』第十三回> 第六講 戦時の音
 整調の問題
 明暗
 批評と紹介
 ■鋼鉄を使はぬ楽器
 ピアノの弾き方指導(第二講)
 師範学校から見た初等音楽教育[(一)]
 思ひ出のテスト盤<随筆>
 <音楽教室>唱歌科担任者へ
 文部省主催聴覚訓練を主とする音楽講習会記
 国語教育の思潮<教育思潮>
 第十二回作曲募集
 応問
 編輯後記
 教材研究(輪講式)

新訂尋常小学唱歌 第一学年用 鳥 木の芽
 第二学年用 がん 紅葉
 第三学年用 麦まき
 第四学年用 山雀
 第五学年用 大塔宮
 第六学年用 明治天皇御製
 新訂高等小学唱歌 第一学年用 村時雨
 第二学年用 実のりの秋

乙寺與志夫作詞 平井保喜作曲 0(1)
 片山頴太郎 2~5
 エルンスト・プッチェル 伊東勉訳 6~12
 12
 宮澤俊義 13~16
 16
 イ・ルウイジキン 多田恒夫訳 17~23
 島田芳文 24~25
 福井直弘 26~33
 サー・ウィリアム・ブラッグ原著 34~39
 栗原嘉名芽訳註
 伊藤完夫 40~46
 金町京助 47
 48~50
 50
 黒澤愛子 51~53
 小島喜久壽 54~57
 勝承夫 58~59
 瀬戸尊 60~61
 岡村勝 62~66
 三尾砂 67~69
 70
 71
 72
 歌詞楽曲 片山頴太郎 81~128
 歌ひ方 澤崎定之
 伴奏法 黒澤愛子 水谷達夫
 教授法 品川三郎 清田竹男

『音楽教育研究』

第2巻第12号(1940年12月号)

【巻頭楽譜】冬の旅

【巻頭楽譜】望郷の花([第九回入選曲])

健全なる娯楽と民衆音楽
 青年と文化
 ヨーデの歌謡集「ムジカント」に就いて(四)
 音楽社会学[(一)]
 ■文部省紹介レコード ■楽譜の別扱陳情
 少年詩篇<詩>
 今年の教育音楽界を顧みて
 作曲界所感
 明暗
 師範学校からみた初等音楽教育(二)
 ピアノの弾き方指導(第三講)

山岸曙光子作詞 町田等作曲 0(1)
 勝承夫作詞 中川徹作曲 0(2)
 増澤健美 2~5
 高野瀏 6~10
 福井直弘 11~18
 P・A・ソローキン M・M訳 19~27
 27
 立原道造 28~29
 中野義見 30~35
 諸井三郎 35~36
 金町京助 37
 小島喜久壽 38~40
 黒澤愛子 41~46

音楽界彙報		46
「ウタノホン」への希望 編纂委員諸氏に呈す		47～49
<音楽教室>唱歌教授の要諦		50～51
レコード界		52
モツァルト伝		53～56
或日の感想<随筆>		57～60
海外楽信		60
杏花咲く村<劇>		61～63
科学教育について<教育思潮>		64～67
第九回作曲入選発表		68
選者の言葉		68～69
文部省所定昭和十六年度音楽科教科用図書一覧		70～71
音楽界彙報		72
応問		73
編輯後記		74
教材研究 (輪講式)		80～120
	歌詞楽曲 片山頴太郎	
	歌ひ方 澤崎定之	
	伴奏法 黒澤愛子 水谷達夫	
	教授法 中原都男 鈴木寛	
新訂尋常小学唱歌 第一学年用	おきやがりこぼし 親の恩	
第二学年用	蛙と蜘蛛	
第三学年用	豊臣秀吉	
第四学年用	廣瀬中佐	
第五学年用	冬景色	
第六学年用	齊藤實盛	
新訂高等小学唱歌 第一学年用	紫式部	
第二学年用	我が家	

『音楽教育研究』

第3巻第1号 (1941年1月号)

【巻頭楽譜】雪		
【巻頭楽譜】春の岬		
【巻頭楽譜】古靴ホテル ([第十回]入選曲)		
新春断想		
楽壇新体制について		
シューベルトの連歌曲「冬の旅」(一)		
■中響演奏会延期 ■三十団体が音楽行進 ■国民音楽院開校 ■ お医者さんの合唱団旗揚げ ■ストコフスキー帰る		
明暗		
七つの声我を誘ふ<詩>		
コンマの問題		
ヨーゼフの歌謡集「ムジカント」について(五)		
<音楽教室>新しき出発		
音楽社会学(二)		
師範学校からみた初等音楽教育(三)		
作曲学講座「フーゲ」[(三)]		
モツァルト伝		
進軍回想譜		
聴覚訓練法の実際		
第十回作曲入選発表		
選者の言葉		
音楽界彙報		
編輯後記		
教材研究 (輪講式)		
	三好達治作詞 野村茂作曲	0(1)
	三好達治作詞 野村茂作曲	0(2)
	水谷まさる作詞 美濃島駒之助作曲	0(3)
	片山頴太郎	2～5
	清瀬保二	6～10
	二見孝平	11～18
		18
	金町京助	19
	江頭彦造	20～21
	伊藤完夫	22～29
	福井直弘	30～37
	竹森實藏	38～39
	P・A・ソローキン M・M訳	40～51
	小島喜久壽	52～55
	ステファン・クレール 片山頴太郎訳	56～65
	スタンダール 竹村猛訳	66～71
	石塚響一	72～75
	岡村勝	76～78
		79
	信時潔	79
		80
		81
	歌詞楽曲 片山頴太郎	89～120
	歌ひ方 澤崎定之	
	伴奏法 黒澤愛子 水谷達夫	
	教授法 吉田照十方 岡村勝	
新訂尋常小学唱歌 第一学年用	雪達磨	
第二学年用	ラヂオ	

	第三学年用	川中島
	第四学年用	村の鍛冶屋
	第五学年用	みがかずば
	第六学年用	日本三景
新訂高等小学唱歌	第一学年用	希望
	第二学年用	聖恩

『音楽教育研究』

第3巻第2号(1941年2月号)

【巻頭楽譜】新月の歌	勝承夫作詞 渡鏡子作曲	0(1)
【巻頭楽譜】草のわが家([第十一回]入選曲)	喜志邦三作詞 林つや子作曲	0(2)
観音芸術の提唱	片山颯太郎	2~5
ナチスの音楽教育	植村敏夫	6~8
シューベルトの連歌曲「冬の旅」(二)	二見孝平	9~16
作曲学講座「フーゲ」[(四)]	ステファン・クレール 片山颯太郎訳	17~20
ピアノの弾き方指導(第四講)	黒澤愛子	21~25
原稿募集		25
小曲<詩>	小山正孝	26~27
音楽社会学(三)	P・A・ソローキン M・M訳	28~33
[]	金町京助	33
レコード界		34
授業・研究・応用	香原一勢	35~39
■市民へ贈る健全な慰安 ■日本放送協会が組織改革 ■満洲音楽文化の建設		39
<音楽教室>スタート線上の音楽教育	荒尠彦	40~41
国民学校低学年に於ける和音訓練及楽譜指導に対する一考察	紺野五郎	42~44
聴覚訓練法の実際(二)	岡村勝	45~46
<紹介と批評>		
兼常清佐著 ショパン		47
大田黒元雄著 ワグナー		48
小松雄一郎選訳 ベートーヴェン書簡集		48~49
ユリウス、カップ著 高野瀏訳 フランツ・リスト伝		49~50
雪日抄<随筆>	乙寺與志夫	51~55
作曲応募についての感想	林つや子	56~57
第十一回作曲入選発表		58
選者の言葉	片山颯太郎	58
音楽界彙報		59
編輯後記		60
教材研究(輪講式)	歌詞楽曲 片山颯太郎	66~108
	歌ひ方 澤崎定之	
	伴奏法 黒澤愛子 水谷達夫	
	教授法 湯山五策 小菅和江	

新訂尋常小学唱歌	第一学年用	人形 桃太郎 犬
	第二学年用	田植 雨 母の心 那須与一
	第三学年用	かぞへ歌
	第四学年用	みなかの四季
	第五学年用	三才女
	第六学年用	夜の梅
新訂高等小学唱歌	第一学年用	幼き頃の思出
	第二学年用	吉野の宮居

『音楽教育研究』

第3巻第3号(1941年3月号)

【巻頭楽譜】大和乙女([第十二回]入選曲)	島田芳文作詞 林つや子作曲	0(1)
国民学校芸能科『ウタノホン』編纂趣旨	角南元一	2~7
特輯「音楽の職域を語る」		
音楽教育者の新使命	岩井義郎	8~11
儀式並に諸行事と音楽	中野義見	12~17
教育音楽放送	沖不可止	18~24

学校吹奏楽団の活動の活動	廣岡九一	25～30
黒人の合唱団と合唱曲	津川圭一	31～37
流行歌と芸術歌謡の境—職域に於ける感想—	武川寛海	38～42
手合図	橋本清司	43～47
折にふれて	岡村勝	48～49
神保環一郎著 レコード音楽 軽音楽を囲みて<紹介と批評>		17
朱謙之著 中村嗣次訳 支那音楽史[<紹介と批評>]		24
■踏出した音楽新体制 ■国民歌謡放送中止		30
夢の一時<詩>	中村眞一郎	50～51
声	齋藤潔	52～54
ふる里の土を思ふ	武内俊子	55～58
<音楽教室>芸能科音楽指導私観	山根毅	60～61
音楽社会学(四)	P・A・ソローキン M・M訳	62～69
メルスマン「音楽通論」について	長廣敏雄	70～77
レコード界		77
入学試験その他	田宮虎彦	78～81
第十二回作曲入選発表		82
選者の言葉	下総皖一	82～83
特輯		
国民学校芸能科音楽について	音楽教育振興会会員	84～122
教育・音楽雑誌について	音楽教育振興会会員	123～127
海外楽信		127
編輯後記		128

『音楽教育研究』

第3巻第4号(1941年4月号)

皇后陛下御誕辰奉祝歌 [楽譜]		
【巻頭楽譜】ぼくらの大陸		
【巻頭楽譜】朝の自転車		
皇后陛下御誕辰奉祝歌に就いて		
皇后陛下御誕辰奉祝歌の作曲に就いて		
特輯 「コドモと音楽」		
コドモと手工と音楽		
児童と仏教音楽		
こどもとレコード		
子供の舞踊		
子供とヴァイオリン		
子供とリズム		
こどもとうたひ方		
託された一人の女兒について		
■新生中国「建国歌」		
■満洲国建国十年祝典序曲		
音楽界彙報		
ドイツの豚と煙突掃除		
童心童語		
支那の子供		
音楽と詩[一]		
明暗		
独逸の歌詞は日本訳で歌ふべきか		
日本的半音と西洋的半音		
■日本子守歌		
作曲学講座「フーゲ」[(五)]		
レコード界		
筑後川のほとりにて		
国語問題		
新訂尋常小学唱歌 教材研究索引		
詞 佐佐木信綱謹作 曲 信	0(1)	
時潔謹作		
異聖歌作詞 片山穎太郎作曲	0(2)	
長田恒雄作詞 杉田潤一作曲	0(3)	
佐佐木信綱謹記	2～3	
信時潔謹記	4～5	
片山穎太郎	6～10	
藤井清水	11～15	
柴田知常	16～20	
澁井二夫	21～26	
藤田経秋	27～29	
上田友龜	30～35	
岡村勝	36～41	
原田彦四郎	42～48	
	20	
	41	
	49	
平原壽恵子	50～53	
きた・あきら	54～55	
竹内好	56～58	
アンドレ・シュアレス 中村眞一郎訳	59～63	
河内三郎	64～65	
エルンスト・プッチェル 丸山武夫訳	66～69	
伊藤完夫	70～75	
	75	
ステファン・クレール 片山穎太郎訳	76～83	
	84	
乙寺與志夫	85～88	
宮嶋夏樹	89～91	
	92～93	

新訂高等小学唱歌 教材研究索引	94
編輯後記	95

『音楽教育研究』

第3巻第5号(1941年5月号)

【巻頭楽譜】陽ざしの歌	藤浦洸作詞 安部幸明作曲	0(1)
【巻頭楽譜】五月野	村野四郎作詞 高田信一作曲	0(2)
特輯「青年と音楽」		
次代の青年と音楽	山崎謙	2~7
青年と音楽	有馬大五郎	8~11
今日の青年と音楽	福井直弘	12~17
青年とレコード音楽	神保環一郎	18~21
青年と作詞一点描風の随想一	喜志邦三	22~27
都塵独語	河内三郎	28~29
独逸の復活祭	宮内鎮代子	30~34
<新刊紹介>西洋音楽史 パウル・ベッカー著 河上徹太郎訳		34
音楽界彙報		35~36
南方の音楽		
バリ島の音楽と舞踊	伊藤祐司	37~43
泰国の音楽事情	クラウス・プリングスハイム ハンス・エリック・プリングスハイム訳	44~48
タイ国の楽器について	黒澤隆朝	49~56
音楽と詩〔二〕	アンドレ・シュアレス 中村眞一郎訳	57~62
音楽に於ける歌詞の問題	勝承夫	63~69
レコード界		70
西洋音楽史概説〔一〕	カール・ネッフ 牧定忠訳	71~74
■アメリカ楽壇の近状		74
特輯「青年と音楽」		
地方の青年と音楽新体制	田村範一	75~77
地方の青年と音楽	生塚原子	77~80
地方の青年と歌謡	石村恵三	80~82
■独逸「音楽大学」 ■「スターリン賞」		82
黎明を走る朝鮮音楽界	大場勇之助	83~86
北京音楽印象記	寶井眞一	87~91
明暗	岡村勝	92~93
新緑随想		
新緑と音楽	鎌尾武男	94~99
花と新緑と音楽と	林喬木	99~102
新緑と民謡と	町田等	103~107
新緑のころ	中原都男	107~110
アイヌの謡	津田甫	110~113
歌曲募集		113
編輯後記		114

『音楽教育研究』

第3巻第6号(1941年6月号)

【巻頭楽譜】日本の窓	中村伊左治作詞 長谷川良夫作曲	0(1)
【巻頭楽譜】雀の宿	勝承夫作詞 片山穎太郎作曲	0(2)
特輯「歌謡に就いて」		
現代歌謡の再検討	藤田徳太郎	2~9
新歌曲の要望について	増澤健美	10~14
歌謡の現状から	長田恒雄	15~18
歌謡とアクセントの問題	大西雅雄	19~24
歌謡雑感	上田穆	25~28
詩と歌謡	風巻景次郎	29~35
言葉<詩>	笹澤美明	36~37
今日の独逸の青年と音楽	エルンスト・プッチェル 三浦鞆郎訳	38~44

厚生音楽三ヶ月	野村茂	45~48
青年と歌謡	赤岸幸輔	49~53
四天王寺聖霊舞楽		53
明暗	河内三郎	54~55
邦訳歌詞の問題	石倉小三郎	56~61
■日伊親善歌劇の夕 ■シュナイダー女史来朝 ■ヂムバリスト音楽学 校長へ		61
外国歌謡の翻訳について	藤浦洸	62~65
音楽界彙報		66
中学校の音楽	青田勝	67~70
女学生の音楽教育学[(一)]	小泉洽	71~79
軽楽器と学校音楽		80~84
レコード界		85
ロシヤ民謡 [(一)]	テ・ポポーワ 多田恒夫訳	86~90
音楽と詩[(三)]	アンドレ・シュアレス 中村眞一 郎訳	91~96
西洋音楽史概説(二)	カール・ネッフ 牧定忠訳	97~101
抗日支那の音楽運動	T・R・S	102
彩色宣撫	勝本耕	103~107
日本詩歌に見られる一の性格	吉田眞三	108~112
■民謡採譜録音行		112
編輯後記		113

『音楽教育研究』

第3巻第7号(1941年7月号)

【口絵写真】ウインの夏 ベートーヴェンを偲ぶ音楽の集ひ 初夏の郊 外 音楽的な農夫の家庭	屬啓成撮影	0(1)
【巻頭楽譜】わが窓	笹澤美明作詞 中田一次作曲	0(2)
【巻頭楽譜】ヨットの歌	安藤一郎作詞 酒井悌作曲	0(3)
【巻頭楽譜】十字街の昼(入選楽曲)	片平庸人作詞 林つや子作曲 片山頴太郎編曲	0(4)
特輯 『家庭と音楽』		
家庭と音楽	弘田龍太郎	2~5
音楽に対する新しい態度	山崎謙	6~12
ピアノ音楽の教授法について	伊達愛	13~17
うたのおはなし	ダンミチ子	18~23
箏について	中能島欣一	24~27
箏について	那智蒼生子	28~35
長唄について	鳥居ツナ	36~41
尺八について	中尾都山	42~44
国民生活とハーモニカ	宮田東峰	45~50
ドイツの文化工作		17
音楽界彙報		51~52
ウインの夏	屬啓成	53~58
フランスの音楽生活	倉田高	59~65
漂流<詩>	藪田義雄	66~67
公園奏楽の今昔	春日嘉藤治	68~72
明暗	河内三郎	74~75
リヒャルト・ワーグナーと猶太人	E.プッチェル KL.プッチェ ル 丸山武夫訳	76~82
ピアノの起源・変遷について(一)	宮内鎮代子	83~90
■日独合作の歌劇 ■パデレフスキー急逝		90
音楽学校見聞記	岡村勝	91~96
音楽に就て	伊藤情報局総裁談	91~96
文検音楽科予備試験問題 昭和十六年四月 即興作する人		97~98
ロシヤ民謡 [(二)]	アンドレ・シュアレス 中村眞一 郎訳	99~104
女学生の音楽教育学[(二)]	テ・ポポーワ 多田恒夫訳	105~109
応募歌曲入選発表と講評	小泉洽	110~118
	片山頴太郎	119~123

教育的断想—初夏の旅から—
編輯後記

井本農一 124～126
127

『音楽教育研究』

第3巻第8号(1941年9月号)

【巻頭楽譜】大日本青少年団歌

国民生活と音楽
時局と軽音楽
詩は先行す
新体制下の音楽
君が代の由来
国民音楽に就て
東北民謡を聴く [(一)]
いない「お」
ウインの家庭と音楽
支那でみた街頭音楽
音楽界彙報
音楽についての随想—接触の美—
初秋<詩>
音楽は何うして放送されるか
ケーテンに於けるバッハの名曲
擬音物語
西洋音楽史概説(三)
■鳥の歌と科学 ■産業戦士の競演
切符制 其他
初秋の思ひ
市民音楽院その後
歌唱随感
ロシヤ民謡(三)
レコード界
ピアノの起源・変遷について(二)
黄八丈
■銃後伊太利の音楽 ■満洲楽壇の一元化 ■国楽研究会
女学生の音楽教育学(三)
夏期鍛錬期間その他
編輯後記

大日本青少年団選定 0(1)
権田保之助 2～7
水野忠恂 8～12
河井醉茗 13～16
島田芳文 17～20
20
武川寛海 21～26
藤井清水 27～29
ダンミチ子 30～31
秋谷マリエ 32～36
宮尾しげを 37～41
42
大江満雄 43～47
岩佐東一郎 48～49
藤井一市 50～57
大塚晋一郎 58～61
安藤清 62～65
カール・ネッフ 牧定忠訳 66～71
71
河内三郎 72～73
片山頼太郎 74～78
多忠烈 79～83
岡村勝 79～83
テー・ポポーワ 多田恒夫訳 84～90
91
宮内鎮代子 92～96
平原壽恵子 97～101
101
小泉洽 102～110
田宮虎彦 111～115
116

『音楽教育研究』

第3巻第9号(1941年10月号)

【巻頭楽譜】病院船の歌

音楽新体制について
時局と音楽教育者
古典派音楽と浪漫派音楽の限界
音楽の音・雑音の音—音感教育私観—
軍歌の記録・二件
工場と音楽(神奈川県工場をめぐるとの記)
工場をめぐりて
ピアノ伴奏に於ける初見の要領
パリーの音楽
音楽界彙報
シュエスター・ゲートルードとベートーヴェンのロンド
放送合唱団の事あれこれ
「音曲玉淵集」と「声曲類纂」
東京放送管絃楽団を語る
レコード界
季節と風<詩>
冬の鐘・夏の鐘
東北民謡を聴く[(二)]

西澤都彌子作詞 渡鏡子作曲 0(1)
辻莊一 2～8
田村虎藏 9～12
屬啓成 13～16
兼常清佐 17～22
堀内敬三 23～26
片山頼太郎 27～32
佐藤美子 33～38
和田肇 39～40
牧嗣人 41～47
48～49
原田光子 50～56
岡本敏明 57～59
藤田徳太郎 60～63
前田[たまき] 64～68
69
乙寺與志夫 70～71
深尾須磨子 72～77
藤井清水 78～81

■台湾音楽の改調	81
明暗	河内三郎 82～83
現代の独逸国民音楽	エルンスト・プツェル 三 84～89
	浦鞆郎訳
ロシヤ民謡(四)	デー・ボポーワ 多田恒夫訳 90～95
カザックとウクライナ民謡	95
社団法人日本音楽文化協会定款	96～99
編輯後記	100

『音楽教育研究』

第3巻第10号(1941年11月号)

【巻頭楽譜】産業報国青年隊隊歌(第一曲)

地方文化と音楽	
日本に於ける楽器政策	
素人故の暴論	
次代を背負ふ国民学校の児童と音楽教育	
音感と生活	
児童に与へる音楽	
少国民文化の興隆と童歌劇—国民音楽促進の一翼として—[(一)]	
八橋検校の百回忌頌徳碑	
支那民衆と音楽	
音楽随想	
伊豆の町<詩>	
フランツ・モーザー先生を憶ふ	
東北民謡を聴く [(三)]	
ライブチヒに於けるバッハ	
音盤について	
西洋音楽史概説(四)	
日露の戦役七八年過ぎ	
古典・浪漫・現代音楽	
編輯後記	

藤澤克己作詞 山田榮一作曲	0(1)
松尾要治	2～6
川上嘉市	7～13
山崎謙	14～19
中野義見	20～26
百田宗治	27～29
岡村眞佐留	30～31
江田一郎	32～38
木村捨三	39～41
瀧遼一	42～48
宮澤縦一	49～51
野長瀬正夫	52～53
尾高尚忠	54～60
藤井清水	61～63
大塚晋一郎	64～68
細井勇	69～73
カール・ネッフ 牧定忠[訳]	74～81
與田準一	82～88
西田直道評	88
	89

『音楽教育』 *『音楽教育研究』改題

第3巻第11号(1941年12月号)

【巻頭楽譜】興亜大行進曲「アジアの力」

国民学校の音楽指導者に望む	
我芸能科音楽の展望	
音楽と音響学	
学校唱歌劇	
国民学校芸能科音楽授業所見	
少国民文化の興隆と童歌劇—国民音楽促進の一翼として—[(二)]	
ハーモニカの文化的価値	
防諜と音楽	
邦楽と舞踊についての随想	
新しい日本歌劇をこゝろみるもの	
日本音楽文化協会の発足	
改題の言葉	
冬について<詩>	
彼岸の追想	
■「軍艦マーチ」の父 故瀬戸口翁追悼献楽式	
レコードの鑑賞	
文化映画の音楽	
支那人と音楽	
名笛抄	
ピアノの起源・変遷について(三)	
■第十回音楽コンクール入賞者	
勤労青少年と音楽	
工場と音楽	

大政翼賛会 大日本興亜同盟 日本放送協会撰定	0(1)
田村虎藏	2～6
草川宣雄	7～11
栗原嘉名芽	12～19
弘田龍太郎	20～25
岡村勝	26～27
江田一郎	28～32
宮田東峰	33～36
久野豊彦	37～43
若狭萬次郎	44～46
神宮寺雄三郎	47～52
	52
	53
大島博光	54～55
池内友次郎	56～61
	61
上山敬三	62～65
久保田公平	66～74
安藤徳器	79～85
乙寺與志夫	86～89
宮内鎮代子	90～96
	96
間仁田幸三	97～101
小西乾太郎	102～106

第一回全国勤労者音楽大会に就いて
ロシヤ民謡(五)
編輯後記

太田通 107~109
テー・ポポーワ 多田恒夫訳 110~115
116

『音楽教育』

第4巻第1号(1942年2月号)

【巻頭楽譜】汗をうたへる
時局と教育者<巻頭言>
芸能科音楽の進展
音楽に於ける劣等感の克服
初等音楽教育界
私はかうして日本語の歌を教へる
私はかうして日本語の歌を教へる
日本上代の音楽
名曲鑑賞教育の実際〔1〕
米英系音楽の閉め出し
東京市国民学校芸能科音楽授業巡り
数学者の音楽談
音楽の総力戦体制
<随想> 春昇地唄ばなし
神の如く静けし<詩>
ギターを手ほどきする
<随想> わが国の琴の書
タイ音楽の楽器編成
明暗
大日本頌歌<詩>
大戦と独逸国民音楽

<随想> 「狂言」に就いて
■音盤界の新発足 ■瀕死の白鳥
中継放送に就いて
原始音楽(一)
芸能科音楽の鑑賞教育に就て
農村音楽指導の一分野
編輯後記

久保徳二作詩 清水修作曲 0(1)
2~3
井上武士 4~6
片山頼太郎 7~11
近森一重 12~13
内田榮一 14~16
四家文子 17~21
三條商太郎 22~27
久保田公平 28~33
33
岡村勝 34~36
森本清吾 37~43
43
富崎春昇 44~45
佐藤惣之助 46~47
伊藤翁介 48~55
藤田徳太郎 56~60
黒澤隆朝 65~71
河内三郎 72~73
南江治郎 74~79
エルンスト・プツェル 野本 80~83
祥治訳
山本東次郎 84~89
89
藤井一市 90~96
R・ヴァルラシエク 小泉治訳 97~108
潟田清 109~113
橋本與四雄 114~117
118

『音楽教育』

第4巻第2号(1942年3月号)

【口絵写真】「怠け蜂とリンダ」より
【巻頭楽譜】文部省撰定国民学校重音唱歌 海 いてふ 冬景色 朧
月夜 故郷 夜の梅
文部省撰定国民学校初等科五・六年用重音唱歌解説
教育の維新<巻頭言>
我が国の音楽教育
音楽教育者の奮起を望む
特輯 城多又兵衛教授に国民学校音楽の「発音及聴音」をきく
技術・方法・精神
ピアノを指導する
ピアノを指導しつつ
スランプ状態にある教育音楽 一統「音楽に於ける劣等感の克服」
ハホト教育
東京市国民学校音楽授業参観記
蒼穹にひらく<詩>
時局下の放送芸能
詩の朗読に就て
朗読詩の方向
詩の朗読に就て
朗読詩運動に就て
故岡野貞一君の逝去を悼む 付・故岡野貞一氏略歴

0(1)
0(2)
下總皖一 0(3)
片山頼太郎 2~3
牛山充 4~10
永井幸次 11~13
岡村勝 14~23
中野義見 24~29
井口基成 30~32
東貞一 33~38
片山頼太郎 39~43
和田信賢 44~49
50~51
乙寺與志夫 52~53
川口劉二 54~57

長田恒雄 58~62
前田鐵之助 63~68
笹澤美明 68~77
田村虎藏 78~80

岡野貞一先生を悼む
 ■徳山[王連]氏逝く
 西洋音楽史概説(五)
 ■第十一回「音楽コンクール」作曲課題
 童歌劇「怠け蜂とリンダ」上演後記作曲・演出者として
 シンガポールに凱歌はあがる 無限輪唱 [楽譜]

国民合唱 此の一戦 [楽譜]

岩手十年の記
 瀬戸口藤吉翁を悼む
 原始音楽(二)
 工場音楽の指導
 編輯後記

井上武士 81~84
 84
 カール・ネッフ 牧定忠[訳] 85~92
 92
 江田一郎 93~100
 大政翼賛会標語 片山頴太郎作曲 101
 大政翼賛会標語 信時潔作曲 102
 新野仁助 103~107
 永田晴 108~111
 R・ヴァルラシェク 小泉洽訳 112~117
 高橋澤五郎 118~123
 124

『音楽教育』

第4巻第3号 (1942年4月号)

【巻頭楽譜】程満光のうたへる

【巻頭楽譜】あゝ此の王国には(童歌劇「怠け蜂とリンダ」より) 教育音楽と教育<巻頭言>
 芸能科音楽の諸問題

■音楽学校師範科の年限延長

教育音楽者への感謝と策励

南方の音楽工作

芸能科音楽の一ヶ年

■第一回室内音楽作品発表会

井上武士氏に国民学校音楽の「教授法・教材指導法の実際」を聴く

中学校と音楽

「声明」の話

或る空間<詩>

音楽師範教育の新時代的適応に就て

I

II

III

IV

北京の一年

日本人の音楽

私の教へるところの話

「信州と音楽」を語る

大東亜の理念と情操を育む童謡

童歌劇「怠け蜂とリンダ」上演後記 続

西洋音楽史概説(六)

国民学校に於ける簡易楽器の指導に就て

編輯後記

程満光絶筆 朝日新聞社訳 0(1)
 詞 片山頴太郎作曲
 江田一郎詩・作曲 0(2)
 片山頴太郎 2~3
 小松耕輔 4~7
 7
 川上嘉市 8~14
 14
 吉田照十方 15~22
 22
 岡村勝 23~32
 柏木俊夫 33~39
 吉田恒三 40~45
 勝承夫 46~47
 牛山充 48~52
 草川宣雄 53~59
 松井力 59~64
 山田辰雄 64~68
 寶井眞一 69~74
 吉村岳城 75~81
 酒井悌 82~87
 町田等 88~91
 島田芳文 92~98
 江田一郎 99~111
 カール・ネッフ 牧定忠訳 112~119
 若松盛治 120~123
 124

『音楽教育』

第4巻第4号 (1942年5月号)

【巻頭楽譜】Indonesia Raya

インドネシア・ラーヤ <解説>

捨身の教育<巻頭言>

国民学校音楽の実際と大東亜問題

芸能科音楽の第二年

国民学校音楽に於ける「音色・日本音階・形式」に就て 下總皖一氏に

聴く

大東亜戦下に於ける教育音楽の放送

初等音楽教育界

楽才と教育

■新生する「日本交響楽団」

カムパニヤの子守唄

楽譜指導我観

0(1)
 青木正 0(2)
 片山頴太郎 2~3
 小松耕輔 4~8
 井上武士 9~14
 岡村勝 15~23
 沖不可止 24~27
 近森一重 28~31
 佐藤隼夫 32~35
 35
 天野秀延 36~38
 上田友龜 39~45

「雅楽」の話	三條商太郎	46～51
邦楽新展開への待望	大島宗考	52～59
楽音とは何か・騒音とは何か —「音響学の常識」第一講—	守田榮	60～67
青年学校に於ける音楽的陶冶	遠藤喜美治	68～72
西洋音楽史概説(七)	カール・ネッフ 牧定忠[訳]	73～77
「ヨハネ受難曲」と「マタイ受難曲」	大塚晋一郎	78～81
鈴木米次郎先生を語る	伊達愛	82～86
樺太の音楽教育	朝倉光子	87～92
吹奏楽の音調整備に就て	廣岡九一	93～99
小松耕輔著 シューベルト(楽聖伝記叢書)[<紹介と批評>]	をかむら	99
<文化時評> 南方文化工作について	南江治郎	100～102
青葉の中に<詩>	高橋たか子	102
原始音楽(三)	R・ヴァルラシエク 小泉洽訳	103～108
音楽教師となりて		
音楽教育者としての抱負		
奉職所感		
特別攻撃隊讃歌	海老原直	109～112
<時局対話>音楽のお膳立て	高岡菊雄	112～114
音楽に就ての断想		115
編輯後記	秦廼舎たくらくさん	116～120
	鈴木寛	121～126
		127

『音楽教育』

第4巻第5号(1942年6月号)

【巻頭楽譜】夏は来ぬ(国民合唱)

【巻頭楽譜】忠霊塔の歌

文検音楽科予備試験問題 昭和十七年五月

歌ふ良寛<巻頭言>

独逸に於ける初等教育音楽

『初等科音楽』の編纂と運用

編纂について

運用について

澤崎定之教授を囲んで 我が国音楽教育の伝統と芸能の特質を語る[座談会]

「昭和交響楽団」について 附・東京市器楽指導研究会の事

聴覚と音感

「靖国舞」の奉献

邦楽の奥行

日本中世芸能の胎生 [其の一]

音楽と詩の持つ宿命 うつろひ行く音楽のすがたに就て

鐘<詩>

■ワインガルトナー逝く

名曲鑑賞教育の実際(2)

■レコード文化協会 ■南方音楽の音盤化

音楽教育界に痛感するもの

音波の色々な面白い性質—「音響学の常識」第二講—

原始音楽(四)

ザックス博士の業績

旅する薔薇の花

西洋音楽史概説(八)

<放送時評>—放送歌謡に就て—

編輯後記

佐々木信綱作詞 小山作之 0(1)

助作曲 片山穎太郎編曲

百田宗治作詞 片山穎太郎 0(2)

作曲

0(3)

片山穎太郎 2～3

エルンスト・プツェル 牧祥 4～11

三[訳]

小松耕輔 12～18

井上武士 18～24

澤崎定之 橋本清司 岡村 25～38

勝

沖不可止 39～44

東貞一 45～51

51

平山蘆江 52～57

森末義彰 58～64

武川寛海 65～71

長田恒雄 68～69

71

久保田公平 72～77

77

栗原泰 78～81

守田榮 82～89

R・ヴァルラシエク 小泉洽訳 90～95

太田太郎 96～104

武内俊子 105～110

カール・ネッフ 牧定忠[訳] 111～115

清水二郎 116～119

120

『音楽教育』

第4巻第6号(1942年7月号)

【巻頭楽譜】大南洋唱歌

海軍と体操

くろがね会制定 0(1)

片山[穎太郎] 2～3

第一回全国勤労者音楽大会に就いて
ロシヤ民謡(五)
編輯後記

太田通 107~109
テー・ポポーワ 多田恒夫訳 110~115
116

『音楽教育』

第4巻第1号(1942年2月号)

【巻頭楽譜】汗をうたへる
時局と教育者<巻頭言>
芸能科音楽の進展
音楽に於ける劣等感の克服
初等音楽教育界
私はかうして日本語の歌を教へる
私はかうして日本語の歌を教へる
日本上代の音楽
名曲鑑賞教育の実際〔1〕
米英系音楽の閉め出し
東京市国民学校芸能科音楽授業巡り
数学者の音楽談
音楽の総力戦体制
<随想> 春昇地唄ばなし
神の如く静けし<詩>
ギターを手ほどきする
<随想> わが国の琴の書
タイ音楽の楽器編成
明暗
大日本頌歌<詩>
大戦と独逸国民音楽

<随想> 「狂言」に就いて
■音盤界の新発足 ■瀕死の白鳥
中継放送に就いて
原始音楽(一)
芸能科音楽の鑑賞教育に就て
農村音楽指導の一分野
編輯後記

久保徳二作詩 清水修作曲 0(1)
2~3
井上武士 4~6
片山頼太郎 7~11
近森一重 12~13
内田榮一 14~16
四家文子 17~21
三條商太郎 22~27
久保田公平 28~33
33
岡村勝 34~36
森本清吾 37~43
43
富崎春昇 44~45
佐藤惣之助 46~47
伊藤翁介 48~55
藤田徳太郎 56~60
黒澤隆朝 65~71
河内三郎 72~73
南江治郎 74~79
エルンスト・プツェル 野本 80~83
祥治訳
山本東次郎 84~89
89
藤井一市 90~96
R・ヴァルラシエク 小泉治訳 97~108
潟田清 109~113
橋本與四雄 114~117
118

『音楽教育』

第4巻第2号(1942年3月号)

【口絵写真】「怠け蜂とリンダ」より
【巻頭楽譜】文部省撰定国民学校重音唱歌 海 いてふ 冬景色 朧
月夜 故郷 夜の梅
文部省撰定国民学校初等科五・六年用重音唱歌解説
教育の維新<巻頭言>
我が国の音楽教育
音楽教育者の奮起を望む
特輯 城多又兵衛教授に国民学校音楽の「発音及聴音」をきく
技術・方法・精神
ピアノを指導する
ピアノを指導しつつ
スランプ状態にある教育音楽 一統「音楽に於ける劣等感の克服」
ハホト教育
東京市国民学校音楽授業参観記
蒼穹にひらく<詩>
時局下の放送芸能
詩の朗読に就て
朗読詩の方向
詩の朗読に就て
朗読詩運動に就て
故岡野貞一君の逝去を悼悼・故岡野貞一氏略歴

0(1)
0(2)
下總皖一 0(3)
片山頼太郎 2~3
牛山充 4~10
永井幸次 11~13
岡村勝 14~23
中野義見 24~29
井口基成 30~32
東貞一 33~38
片山頼太郎 39~43
和田信賢 44~49
50~51
乙寺與志夫 52~53
川口劉二 54~57

長田恒雄 58~62
前田鐵之助 63~68
笹澤美明 68~77
田村虎藏 78~80

音楽教育と家庭	霜田静志	4~7
第一回男子合唱競演会を聴いて	大和田愛羅	8~11
国民学校音楽の「教授実践の方法」を語る[座談会]	出席者 関根保江 永山文 代 古谷孝一 山寺嘉七 若 松盛治 岡村勝	12~23
東京市民国民学校「芸能発表会」印象記	東前吉郎	24~29
「中学唱歌」の研究[一]	片山穎太郎	30~37
邦楽雑談	高柳光壽	38~44
日本中世芸能の胎生 其の二	森末義彰	45~50
名曲鑑賞教育の実際(3)	久保田公平	51~56
比律賓人と音楽	仲原善徳	57~61
音はどうして出るか。楽器の原理—「音響学の常識」第三講	守田榮	62~69
中島六郎先生を憶ふ	瀬名貞利	70~75
中島六郎先生の憶ひ	森本清吾	75~79
中島先生に音楽を教はつた頃	篠原雄	80~84
中島先生の憶ひ出	荒木得三	85~89
「富山と音楽」を語る	R・ヴァルラシエク 小泉洽訳	90~95
原始音楽(五)	清水二郎	96~101
<放送時評>芸能囑託・国民合唱	乙寺與志夫	98~99
北の島にて<詩>	カール・ネッフ 牧定忠[訳]	102~110
西洋音楽史概説(九)		110
三首の万葉短歌による交声曲 音楽コンクール作曲の入選決定	岸田一	111~114
基礎訓練指導経過		115
編輯後記		

『音楽教育』

第4巻第7号(1942年8月号)

【巻頭楽譜】中学唱歌より 旅路の愉快 明日は日曜 寄宿舎の古釣瓶	片山穎太郎編曲	0(1)
駒の蹄 富士山	片山穎太郎	2~3
文化の逆封鎖時代<巻頭言>	戸川行男	4~9
特異児童と音楽		9
楽壇の芸術院会員—安藤、今井、信時、山田の四氏決る	中野義見	10~16
国民学校に於ける音楽会への再検討		16
■満洲へ音楽使節	鈴木吉祐	17~22
芸術の宣伝的契機		
作曲に於ける日本的なるものに就て	下總皖一	23~31
作曲に於ける日本的性格に就て	長谷川良夫	31~37
作曲に於ける日本的なものに就て	吉田昇	38~45
音楽と学生生活	岩佐東一郎	42~43
旅中小吟<詩>	片山穎太郎	46~51
「中学唱歌」の研究[二]	薄金兼次郎	52~57
大衆娯楽の表裏	森末義彰	58~63
日本中世芸能の胎生 其の三	守田榮	64~71
音響に関する技術—「音響学の常識」第四講—	岡田次郎	72~77
ベートーベンの絃楽四重奏曲	伊達愛	78~83
日本の家庭とピアノ	田中正子	84~90
日本の家庭とピアノ	平尾貴四男	91~93
テオドール・デュボアの「和声学」に就て	久保田公平	94~100
名曲鑑賞教育の実際(4)	R・ヴァルラシエク 小泉洽訳	101~106
原始音楽[六]		106
■第十二回音楽コンクール作曲募集	上代晃	107~112
音感覚の心理学的一考察 特に聴覚を中心とする感覚様相の問題に就いて—		
村の音楽教育—村の音楽家となる記	古武善松	113~119
編輯後記		120

『音楽教育』

第4巻第8号(1942年9月号)

【巻頭楽譜】天景	萩原朔太郎作詞 野村茂作 曲	0(1)
----------	-------------------	------

意味を忘れた音楽は<巻頭言> 帝国芸術院(第三部)新会員の横顔 安藤幸子夫人 「箏の人」今井慶松氏 信時潔先生を語る 妥協を排した山田耕筰氏 浪漫派音楽の自覚と創造—ロベルト・シューマンについて ヒンデミット先生の事ども 海豚と軍艦<詩> 耳に聴えぬ音の話—「音響学の常識」第五講— 私の歌唱指導 主として躰について もつとまじめに、しんけんに一全新内人に寄せる言葉 源氏物語に現はれた音楽—「若菜」下の巻の音楽に就て 特輯 音楽実践のコツ 伴奏の技術に就て 音楽教授法 吹奏楽指導 絃楽合奏の仕方 工場合唱の指導に就て レコード吹込 音感教育の遊戯化 民謡採譜法 原始音楽〔七〕 放送の懐古趣味 ミハルスに依る律動訓練の系統案 編輯後記	片山穎太郎 牛山充 中能島欣一 片山穎太郎 堀内敬三 吉田秀和 中瀬古和 上田穆 守田榮 岡村勝 岡本文彌 藤田徳太郎 萬澤恒 上田友龜 深海善次 酒井悌 野村茂 鳴海信輔 一宮三千子 藤井清水 R・ヴァルラシエク 小泉洽訳 清水二郎 山寺嘉七	2~3 4~7 7~11 11~15 15~18 19~24 25~30 28~29 31~37 38~41 42~45 46~51 52~58 59~64 65~69 70~76 76~81 82~87 88~92 93~102 103~108 109~111 112~115 116
--	--	--

『音楽教育』

第4巻第9号(1942年10月号)

【巻頭楽譜】満洲国国歌 【巻頭楽譜】「中学唱歌」より 荒城の月 馬上の少年 豊太閤 初旅 教育音楽者の健歩<巻頭言> 局外者は斯く音楽に望む 物的設備と人的設備の完成を 音楽のマイナス的要素への考案を 作曲に於ける血液と民族意識の参加 歌ふ事と国民生活 「歌曲ヲ正シク歌唱シ」の心理学的考察 少年<詩> 日本文学の朗読とその種々相 箏曲の手ほどき今昔 少年時代のシュヴァイツァー 私の歌唱指導 声音の練磨と教育の目標 「中学唱歌」の研究 モーツァルトの室内楽 音楽通論(田辺尚雄著)[<紹介と批評>] 中支見聞記 大連に於ける音楽教育の現状 名曲鑑賞教育の実際(5) 「まじりまる」抄 豊原時元と源義光の芸道秘説に就て 原始音楽(八) 芸能科音楽への苦言 軍艦行進曲記念碑 模型まづ完成 編輯後記	満洲帝国政府制定 片山穎太郎編曲 片山穎太郎 佐藤隼夫 松永安彦 伊福部昭 柴山剛 武内俊子 藤田徳太郎 藤田斗南 津川主一 岡村勝 片山穎太郎 岡田次郎 井上武士 熊野力王 久保田公平 乙寺與志夫 R・ヴァルラシエク 小泉洽訳 神鳥高光	0(1) 0(2) 2~3 4~7 8~13 14~20 21~27 24~25 28~33 34~38 39~45 46~48 50~53 54~59 59 60~65 66~70 71~81 82~87 88~93 94~96 97 98
---	--	---

『音楽教育』

第4巻第10号(1942年11月号)

【口絵写真】敦煌出土大方便報恩経变相図 龜茲古都壁画		0(1)
----------------------------	--	------

【口絵写真】教学ニ関スル御沙汰	0(2)
【巻頭楽譜】愛国の花(国民歌謡)	福田正夫作詞 古關裕而作曲 片山穎太郎編曲
合唱への讃辞<巻頭言>	片山穎太郎
これからの音楽者が教養してほしい方向	牛山充
修了式(卒業式)の歌詞募集	10
女学校の音楽	安藤高
■職場の音楽競技	13
新制師範学校の音楽教育に待望する【座談会】	大和田愛羅 小島喜久壽 鳥居忠五郎 松本寛郎
■映画音楽の改善	33
西域音楽東伝の跡を探ねて	岸邊成雄
音楽教育の一転期	松島彝
美しい日のために<詩>	野長瀬正夫
ピアノを幼い人達に教へる仕方[(一)]	伊達愛
アイウエオの歌 [楽譜]	日本放送協会(採譜者 片山穎太郎)
厚生音楽の諸問題	52~53
厚生事業と音楽	牧哲夫
厚生音楽と指導者の問題	清水脩
工場の合唱	木川靖
幼年期のリズム訓練と其の実際	天野蝶
中学生と詩を読みながら	榊原美文
放送の性格	清水二郎
音楽者気質	79~81
一途の道	唐端勝
現実に飛翔する	上山敬三
我流で創る音楽	兼常清佐
原始音楽(九)	R・ヴァルラシエク 小泉洽訳
編輯後記	93~99
	100

『音楽教育』

第4巻第11号(1942年12月号)

【口絵写真】第四回女子中等学校合唱競演会	0(1)
【口絵写真】瀧廉太郎氏 新清次郎氏	0(2)
【巻頭楽譜】大波の	北白川宮永久王殿下御歌 片山穎太郎謹作 許渾詩 野村茂作曲
【巻頭楽譜】わかれ	片山穎太郎
大東亜暦第二年と音楽<巻頭言>	2~3
世阿彌特輯	野々村戒三
能楽への理解	土岐善磨
新作能小論 世阿彌の伝書に従つて	藤田徳太郎
日本音楽に及ぼした能楽の影響	大和田愛羅
第四回女子中等学校合唱競演祭を聴いて	芝祐泰
国楽「神楽」に就いて	近森一重
鑑賞教材の研究	新清次郎
瀧廉太郎氏の思ひ出	三尾砂
音楽教育に於ける知性的要素	長田恒雄
国徳歌<詩>	44
■愛国百人一首	片山穎太郎
「中学唱歌」の研究[(三)]	板垣了助
音楽教育のコツ 読譜訓練の範囲と程度の問題	伊達愛
ピアノを幼い人達に教へる仕方(二)	山本正夫
音楽教育随想	久保田公平
名曲鑑賞教育の実際(6)	藤澤紫朗
「おゝ雲雀」の合唱を仕上げる話—工場の合唱はかうして生れる	清水二郎
懸賞付き放送・その他	79~81
第十一回音楽コンクール	81
原始音楽(一〇)	R・ヴァルラシエク 小泉洽訳
音感教育小論	安福健吉
芸術の教化力 芸術の指導力 (新日本文化—「芸術の問題」より)	伊東延吉

西洋音楽史概説(一〇)
編輯後記

カール・ネッフ 牧定忠訳 98~107
108

『音楽教育』

第5巻第1号(1943年1月号)

【巻頭楽譜】嘉辰(朗詠による意想曲)
厳肅なる新春の詞<巻頭言>
音楽教育者への要望
音楽文化高揚のために
音楽今昔記
音楽趣味の今昔記
教育音楽今昔記
声楽思ひ出話
作曲今昔記
ディスク今昔記
音楽教育の新生面 世界的使命を有する国民音楽創造への歩み
美しき朝のうた<詩>
中島六郎先生の発声法に就て
歌のころ—日本人の心からなる歌を
音楽教育雑録 音楽訓導体験記
初等科音楽一月教材
バッハ以前の室内楽
この決意 [楽譜]
裁断の物指
「国民の歌」三部作
西洋音楽史概説(十一)
ショパンの芸術と生涯(リスト著 露澤忠枝訳)[<紹介と批評>]
南方みやげばなし
原始音楽(十一)
新しき年に期待す
編輯後記

謝偃詩 芝祐泰編曲 0(1)
片山颯太郎 2~3
井上武士 4~9
唐端勝 10~15

牛山充 16~20
草川宣雄 21~25
太田恒子 25~29
池内友次郎 30~34
岩崎雅通 35~38
原繁義 39~44
勝承夫 42~43
宇多五郎 45~51
壇道子 52~56
山下正 57~61
平岡均之 62~68
岡田次郎 69~76
大政翼賛会宣伝部 77
川上嘉市 78~82
82
カール・ネッフ 牧定忠訳 83~91
91
關口典之 92~96
R・ヴァルラシエク 小泉洽訳 97~103
清水二郎 104~107
108

『音楽教育』

第5巻第2号(1943年2月号)

【巻頭楽譜】春江花月夜
音楽と魚とアジアの総決起<巻頭言>
時代と教育音楽者
日本に於ける音楽の印象
特輯 日本語声楽に就いて
日本語唱歌に就いて
日本語声楽の三つの問題
日本語と日本人の声楽
日本語による声楽
日本語の陰影と内容的表現
正しい日本語の発音とアクセント
■国民歌唱運動
歌手の立場から
箏曲と地歌の変遷
文検受験生に与へる言葉
文検音楽科予備試験問題 昭和十七年五月
鑑賞教材の研究
手紙 故北原白秋氏作『城ヶ島の雨』の世に出づるまで
ピアノを幼い人達に教へる仕方[(三)]
ヘンデルの絃楽合奏曲
ミハルス指導の実際
音楽教育の新生面
粉雪に寄せて<詩>
信時潔氏に朝日文化賞

隋煬帝作詩 小村定吉訳詩 0(1)
野村茂作曲
片山颯太郎 2~3
中野義見 4~8
エ・プツェル 尾崎忍訳 9~13

澤崎定之 14~17
四家文子 17~19
城多又兵衛 19~21
藪田誠一 22~24
神宮寺雄三郎 24~29
壇道子 29~31
31
藤山一郎 32~34
藤田斗南 35~39
小松耕輔 40~45
46
近[森]一重 47~51
下二三十 52~55
伊達愛 56~60
岡田次郎 61~65
千葉みはる 66~71
原繁義 72~77
乙寺與志夫 74~75
77

初等科音楽二月教材	
名曲鑑賞教育の実際(7)	
音楽と放送	
音楽五十年史(堀内敬三著)[<紹介と批評>]	
原始音楽(十二)	
編輯後記	

平岡均之	78~83
久保田公平	84~90
瀬戸義久	91~94
	94
R・ヴァルラシエク 小泉洽訳	95~99
	100

『音楽教育』

第5巻第3号(1943年3月号)

【巻頭楽譜】聖戦三歌

たたかひて

八潮路の

神のゆるしたまはぬ

<さつてはいけない>巻頭言>

ゲーテと音楽(一)

音楽教育の体験を語る 其一

かかる日に<詩>

合唱指導者の注意[(一)]

少年団合奏隊

華かなる幻想

初等科音楽三月教材

基礎訓練二ヶ年の回顧

[ピアノを幼い人達に]教へる仕方[(四)]

■生れ変る讚美歌 ■ユンケル翁の誕生日

地唄研究の頃—『新・京の四季』の追憶

鑑賞教材の研究

国民学校音楽教室を巡りて

国民学校芸能科音楽巡り

撃ちてしまむ

特輯 信時潔氏を語る

信時潔氏を語る

信時潔先生作品年譜略

信時さんの事ども

信時先生と日本的作曲

教室に於ける信時先生

大伴氏言立 『海行かば』の歌詞に就いて

海ゆかば

鼻 竹本義太夫出世ばなし

原始音楽[十三]

<放送時評>音楽性の貧困

西洋音楽史概説(十二)

編輯後記

谷馨作歌 片山穎太郎作曲	0(1)
积迢空作歌 片山穎太郎作曲	0(2)
齋藤茂吉作歌 片山穎太郎作曲	0(3)
片山穎太郎	2~3
エルンスト・ブツェル クロ	4~7
ティルデ・ブツェル 山口龍夫訳	
中野義見 (聴き手 岡村勝)	8~14
北村秀雄	12~13
シュウイッケラート 福井直弘訳	15~19
廣岡淑生	20~24
	24
平岡均之	25~30
三嶋安秀	31~33
伊達愛	34~39
	39
兼常清佐	40~44
近森一重	45~50
梅澤信一	51~54
久木原定助	54~57
	57

颯田琴次	58~61
岡田次郎	62~67
太田恒子	68~69
下總皖一	69~70
夏目鏡子	70~71
乙寺與志夫	72~73
片山穎太郎	74~76
水谷式男	77~79
R・ヴァルラシエク 小泉洽訳	80~85
清水二郎	86~89
カール・ネッフ 牧定忠訳	90~95
	96

『音楽教育』

第5巻第4号(1943年4月号)

【巻頭楽譜】モーツァルトの子守歌(Wiegenlied)

音楽文化<巻頭言>

音楽学校は如何にあるべきか

本質論による本科の根本的改革

指導者としての教養と技術

大東亜に誇り得る音楽学校

唱歌と讚美歌との交渉

音楽教育の体験を語る 其二

掌について<詩>

■音楽で戦力増強へ

堀内敬三訳詩 W.A. Mozart	0(1)
二重唱編作片山穎太郎	2~3
	2~3
牛山充	4~7
堀内敬三	7~9
山本直忠	9~13
津川主一	14~18
中野義見 (聴き手 岡村勝)	19~26
高祖保	22~24
	26

合唱指導者の注意〔二〕	シュウィッケラート 福井直弘 訳	27～32
歌曲表現に関する覚書	浦崎永著	33～37
教案及び教授細目の研究(一)	草川宣雄	38～42
歌の歌ひ方(草川宣雄著)〔紹介と批評〕		42
シューベルトの歌曲鑑賞1	藁科雅美	43～47
■「明治節奉祝歌」の作曲者杉江氏逝く		47
我国楽譜印刷の過程	白井保男	48～52
初等科音楽四月教材	平岡均之	53～58
■十七年度文化協会賞・毎日賞		58
ゲーテと音楽〔二〕	エルンスト・プッチェル クロ ティルデ・プッチェル 山口龍 夫訳	59～65
音楽的天賦と他の素質との関係 [其一]	柴山剛	66～70
鑑賞教材の研究	近森一重	71～76
音楽に於ける基礎力の一斑と錬成法	湯田清	77～82
国民学校に於る簡易楽器の 合奏用楽器の編曲法 [(一)]	若松盛治	83～86
<放送時評>放送余技説	清水二郎	87～89
西洋音楽史概説〔十三〕	カール・ネッフ 牧定忠訳	90～95
編輯後記		96

『音楽教育』

第5巻第5号(1943年5月号)

【巻頭楽譜】初夢(かこうた)	古歌 片山颯太郎作曲	0(1)
終刊の辞	音楽教育編集部	0(2)
春宵紛思<巻頭言>	片山颯太郎	2～3
初等科音楽三・四の編纂と運用について		
編纂について	小松耕輔	4～9
運用について	井上武士	10～15
少国民錬成と童謡	河村光陽	16～20
軍用喇叭とその音楽	春日嘉藤治	21～25
ハイドン絃楽四重奏曲	岡田次郎	26～30
鑑賞教材の研究	近森一重	31～35
季節の花々	壇道子	36～37
浪曲と日本叙事音楽	川喜田長	38～42
一億皆唱の旅 土佐の巻	神宮寺雄三郎	43～48
薫風五月歌<詩>	喜多章	46～47
この決意 [楽譜]	大政翼賛会宣伝部	49
合唱指導者の注意〔三〕	福井直弘	50～53
瀧廉太郎氏の作品に就いて	新清次郎	54～55
初等科音楽五月教材	平岡均之	56～61
建艦愛国運動へ		61
花のある朝	武内俊子	62～64
ゲーテと音楽(三)	エルンスト・プッチェル クロ ティルデ・プッチェル 山口 龍夫訳	65～67
■楽壇挙つて建艦愛国運動へ		67
音楽的天賦と他の素質との関係 其二	柴山剛	68～71
原始音楽(十四)	R・ヴァルラシエク 小泉治訳	72～79
国民学校に於る簡易楽器の 合奏用楽器の編曲法 [(二)]	若松盛治	80～85
西洋音楽史概説(十四)	カール・ネッフ 牧定忠訳	86～91
編輯後記		92

個人的に取り組んできた作曲家・信時潔資料研究の途中で、少々横道にそれて、今回の調査を行ってみた。そもそも、この雑誌と信時潔の関係に気づいたのは、第3巻第4号(1941年4月号)の「皇后陛下御誕辰奉祝歌」を偶然見つけたのがきっかけだった。信時の場合、雑誌が作品の発表の場であった例は極めて少ない。なぜ突然(に見える)ここに発表しているのか?と探しているうちに、なにか関係がありそうだと直感し、全冊に目を通した結果、関係記事が多数見付き、巻頭言を多く書いている片山頴太郎が、一番の接点であつたらしいことが、わかってきた。

単に信時執筆記事、信時潔についての記事が多いだけでなく、信時が興味を持っていたテーマが多数取り上げているという感じを受けた。信時を評して「石橋を叩いて渡らない」と言われたように、例えば作曲上の新しい技法を知っても、すぐそれに飛びついて実践することはなかった。その分、次世代の人々に、あれこれ可能性を示唆し、助言していたことは、当時接した人たちの証言からもわかっている。信時が興味を持っていたテーマ、例えば唱歌指導について、青年と音楽について、児童歌劇について、あるいは先駆者瀧廉太郎や伊澤修二について、などなど。それらについて、誰に書いてもらってはどうか、こんなテーマはどうか、と話していた姿が目につかぶ。

信時門下生や親しく交流のあつた音楽家も、執筆者・作曲者として多数登場している。片山と三人で交互に作曲募集の審査をした下総皖一。渡(のち夏目)鏡子、柏木俊夫、長谷川良夫、益子九郎、澤崎定之、宮内(のち瀧崎)鎮代子。

信時が芸術院会員に選出された時には、「帝国芸術院(第三部)新会員の横顔」として、片山による「信時潔先生を語る」が掲載されている。また、朝日賞受賞を機に組まれた特集「特輯 信時潔氏を語る」(第5巻第3号・1943年3月号)は、ほかの音楽雑誌にはあり得ないことだった。おそらく記事が「朝日賞受賞記念特集」と大々的に歌つたものであつたら、信時自身は大いに気を悪くしたのであろうが、そこは信時という人を知り尽くした人(おそらく片山頴太郎)が手を尽くし「信時潔先生を語る」にとどめ、編輯後記にひっそりと「朝日文化賞として、音楽部門から信時潔氏の『海ゆかば』が受賞された」「本号は諸氏の稿を得て些か之を記念した」と書かれている。

私が、ひとつのテーマ「信時潔」で、この雑誌に目を通し、さまざまな情報を得たように、さまざまな研究課題が潜んでいることだろうと思う。この「総目次」が、今後の研究の手助けになれば幸いである。

なお、この「総目次」のタイトル中の「昭和戦前期」は、戦後にも『音楽教育研究』という雑誌があつたため区別するために「戦前」としている。(戦後の『音楽教育研究』は、戦前の同名の雑誌を継承したものではない。)今回の目次集作成にあたって、創刊号から順に読み進むうちに、「戦前」ではない、まさに「戦中」であると思える記事が増えて行き、「戦前の」という言葉に違和感を覚えた。しかし、「戦前・戦中の」とするにしても、どこを「戦争の初め」と考えるか—ということもあり、それもまた難しい。あくまでも戦後の『音楽教育研究』ではない、終戦以前に刊行されていた『音楽教育研究』とその継続後誌『音楽教育』の目次集であるということ、お断りしておきたい。

最後まで疑問のまま残つたのは、この雑誌の位置であつた。この雑誌に先立つこと16年、1923年に創刊された『教育音楽』という日本教育音楽協会ⁱⁱの機関誌があつた。戦時中、終刊

あるいは廃刊を宣言したのかどうかは未確認だが、1940 年末までは続いている。しかし、翌 1941 年 12 月、雑誌統合の折に残ったのは、歴史の古い日本教育音楽協会の『教育音楽』ではなく、音楽教育研究会（編集）の『音楽教育研究』であった。しかしながら、音楽教育史では、ほとんどこの雑誌『音楽教育研究』『音楽教育』や、そこに掲載された内容について言及されてこなかったのは何故だろうか。おそらく、機関誌『教育音楽』の日本教育音楽協会の会員であった井上武士や小出浩平が、戦後「復権」「復興」した事情によるものだろう。人脈が繋がり、組織として直接のつながりはないものの、結果的には日本教育音楽協会という名称を引き継いだⁱⁱⁱ形となり音楽教育史の 1 つの流れとして扱われてきた。一方の雑誌『音楽教育研究』『音楽教育』の中心的人物であった片山颯太郎は、戦後「音楽教育」に直接かかわりを持たなくなり、東京を後にし、出身地の関西に移っている。『楽式論』『音楽通論』『対位法』『和声学』などの翻訳を手がけた作曲家・音楽理論家として、後進を指導することに専念した。冒頭に、この雑誌は音楽教育史において、その存在を抹殺されたのかと思うほどである、と書いたが、音楽教育界全体が「大東亜教育音楽への精進」に邁進しようとしたことには触れたくない、戦後と切り離したい意識も多分に働いて、音楽教育史上、忘れられ、取り残されていたのではないか。

終刊号の編輯後記（きた・あきら著）には「新訂小学唱歌の教材解説にはじまった本誌の責務は、芸能科音楽の誕生と共にひと先づ其の幕を閉づべきであつたかも知れない。そこに本誌の脱皮が余儀なくされた。かくして危く蹉跌を免れて、教育部門に於ける唯一の音楽雑誌として再生して茲に二年、漸く本然の姿に復し得たる」とある。1943 年という厳しい時期において、ぎりぎり許される表現で、このように書いた、その裏に隠された思いは、何だったのだろうか。日本音楽教育史におけるこの雑誌の位置づけについては、諸賢のさらなる検証を期待したい。

末筆ながら、本目次集作成のため、東京文化会館音楽資料室、上野学園図書館、ことに山口大学総合図書館には格別なご配慮をいただきました。また、武蔵野音楽大学図書館の渡辺定夫氏、昭和戦中期の音楽雑誌記事一覧作成の先輩である小関康幸氏のご助言、ご協力をいただきました。ありがとうございました。

信時裕子（ウェブサイト「信時潔研究ガイド」主宰。日本近代音楽館勤務^{iv}）

~~*ここに掲載した総目次は、文字検索が出来るようWEB 上でも公開する予定です。詳しくは現在公開中のサイト「信時潔研究ガイド」<http://home.nifty.jp/~ff/nobu/>でもご案内します。~~^v

ⁱ 例えば、下総皖一著「作曲家信時潔」（『音楽の友』1956 年 10 月）

ⁱⁱ 日本教育音楽協会については上田誠二氏の「第一次世界大戦後日本の音楽教育運動--日本教育音楽協会の設立と展開」（『歴史学研究』2005 年 3 月）、および「1930 年代の音楽教育運動--日本教育音楽協会の活動」（『ヒストリア』2005 年 9 月）に詳しい。

ⁱⁱⁱ 小出浩平が『音楽教育の証言者たち（上）戦前を中心に』（木村信之編 音楽之友社 1986 年）のインタビューで証言している。

^{iv} 変更のため抹消。東京音楽大学附属図書館勤務(2021年6月)

^v 公開サイト変更のため抹消。(2021年6月)